

「晴雨計・その後」⑪

「ユーフォリア」

平山征夫

いよいよ「晴雨計、その後」

も最終回となった。二十五年前と同じ日に書こうと満を持していたが、ちょっと遅れてしまった。それにしても自然の営みはすごい。二十五年の時の経過が

まるでなかったように繰り返す。二十五年前、晴雨計は桜が終わり新緑が芽吹く年間で一番良いこの時期、春の宵を楽しみながらぶらぶら帰るところで終わっているが、今も春の宵を楽しみながら帰っているけれど、好みのバーのカウンターに座ることはない。

今年は桜が咲いてから低温の

日が続いたため、永く眺めることが出来たし、たまたま東京で桜満開の四月初めに数日上京することがあったので、東京から新潟へと満開の桜を続けて眺めることが出来た。でも真っ青な空の下で桜を眺める日はなかった。今の世相のような曇り空ばかりだった。

桜と言えば、いつ頃からかこの時期になると「あと何回見ることが出来るのかなあ」と思うようになった。その思いは「あと何年生きるのかなあ」というのとは微妙に違う。凜として生きた人として私が尊敬している詩人・茨木のり子も「さくら」という詩を書いている。

「ことしも生きて さくらを

見ています ひと生涯に何回ぐらいさくらをみるのかしら

ものごころつくのが十歳ぐら

いなら どんなに多くても

七十回ぐらい

三十回 四十回のひともざら

なんという少なさだろう

・・(中略)・・

あでやかとも妖しとも不気味

とも 捉えかねる花のいろ

さくら吹雪の下を ふらら

と歩けば

一瞬 名僧のごとくにわかる

のです 死こそ常態 生は

いとしき蜚気楼と

最後の「死」と「生」の表現

は衝撃だった。確かに悠久の時

間の中では一人の人間の「生」

は非常態、蜚気楼なのだろう。

だとすればその間は桜吹雪に囲

まれ「ユーフォリア」でありた

いと願うのは私だけだろうか。

数年前にノンフィクション作

家・後藤正治が「清冽」という

タイトルで茨木の本格評伝を書

いた。彼女の代表作「倚りかか

らず」や「自分の感受性くらい」

を読むと私自身が叱られている

ようで背筋がピツとする。でも

私が一番好きな彼女の詩は「わ

たしが一番きれいだったとき」

だ。その本にも写真が載ってい

るが、若い時茨木はきれいだった。

た。

それにしても「ユーフォリア

(至福)」というタイトルで書い

た随筆が二十五年前と随分違ったものになったのは何故だろうか。あの時のように「春がきた」

を歌う浮き浮きした気持ちにならないのだ。そうだ二十五年前はバブル経済の余燼がまだくすぶっていたし、何よりベルリンの壁が崩壊し、ペレストロイカ後ロシアは混乱はしていたが、とにかく冷戦が終わり、世界は平和に向かうという希望があった。新潟にも環日本海交流の幕が開いたという希望の時機到来と言う夢があった。しかし、今現在どうだろう。イスラム国等による欧州でのテロの横行、デフレ経済から脱出できず低成長に悩む先進国経済、さらにはグローバル化の影で

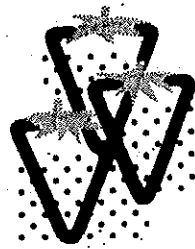
国家間も国民間も格差が拡大、不満が充満し、飢餓と貧困に悩む人々はむしろ増えている。

二十五年前皆が期待したユーフォリアはあの時だけだった。そして新潟も描いていた北東アジア経済交流圏の拠点になれずにいる。

今、私たちは遠くに行ってしまった「ユーフォリア」をもう一度取り戻すにはどうしたらよいか、考えるべきなのではないだろうか。

(平成二十八年四月二十七日)

計 | 雨 | 晴



春が来た／春が来た／どこに

来た／山に来た／里に来た／腹に来た（冬場、運動不足で出た腹が春とともに少しへこんだこの意味）。とにかく新潟の春は

心弾む。季節感の薄い東京の生活に慣れた私には、萌（も）え出す春、などという表現では物足りない。少し品は悪いが、発情期の春、など言っってはしゃいでいる。幸福な気持ちを表す言葉だ。ユーフォリアと、という英語がある。ドイツ統一と

オリアである。

そして、新潟は今「環日本海

ユーフォリア

時代」の幕開けを迎えた。だが、その前途は多難である。ソ連のペレストロイカが方向を失い、そのうえ経済が極度に悪化している。対岸からの熱いラフォー

果たさなければならぬ全国的な役割でもあるからである。さらに重要なのは、これを契機に新潟は二十一世紀に向けた街づくりを努めることである。「人間らしくなくては生きていけない。でも優しくなくては生きていく価値がない」。私は、

湾岸戦争の勝利の際、盛んに欧米の新聞で使われた。新潟の春はまさにユーフォリアである。ソ連経済が立ち直るには市場原理導入しかない。回りの道をして、も必ず環日本海時代は訪れる。その時新潟が拠点都市としての機能を発揮するためには、今からその用意をおかなくてはならない。それが新潟に住む人々にユーフォリアをもたらすからだけでなく、地理的に新潟が

平山 征夫 (日本銀行 新潟支店長)

レイモンド・チャンドラー描く探偵フィリップ・マローウのこの言葉が好きである。この言葉は今のソ連との関係にもあてはまる。確かに経済面は厳しくなるとは付き合えない。だが、より大切なのは隣国の人への優しい気持ちではないだろうか。それにしてもソ連にユーフォリアはいつ訪れるのだろうか。好みのバーのカウンターに一人座り、何となくこんなことを考えていた。でもこれが今の私のささやかなユーフォリアなのだが。本欄の執筆も今回で終わり。宿題を終えた子供の心境である。時々に麗しき春の宵。さて、春が来た、でも歌いながらフラフラ帰るとしよう。では皆さん、さようなら。